



TITLE:

<Book Review>William A. Smalley,
Outline of Khmu? Structure. An
Essay of the American Oriental
Society No.2, New Haven,
Conneticut, 1961,xix+45p.

AUTHOR(S):

三谷, 恭之

CITATION:

三谷, 恭之. <Book Review>William A. Smalley, Outline of Khmu? Structure. An Essay of the American Oriental Society No.2, New Haven, Conneticut, 1961,xix+45p.. 東南アジア研究 1964, 1(4): 107-108

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54866>

RIGHT:

同じ《to eat》でも、“vulgar”であるといった様に、単語の level が示されている。この社会的に定まった level は、我々外国人にとって最も困難な問題の一つだといえるが、この点について説明が加えられているということは、この辞典を非常に有用なものとしている。本書では、archaic, colloquial, common, deferential, derogatory, elegant, epithet, euphemism, expletive, figurative, idiomatic, illiterate, literary, obsolete, obsolescent, royal, sacerdotal, slang, vulgar, written の計 20 の項目が用いられている。

③ 各単語について、その単語を中心として作られる phrases や idioms があげられており、反意語、同意語も適当に示されている。更に、必要な場合には、“Note”の項を設けて、当該単語の用い方や似た意味を持つ他の語との相異などについて、例文と共に説明が加えられている。この様な意味で、本書は単に受動的に引くだけの辞書としてのみならず、タイ語を書き話す場合にも充分役に立つと考えられる。しばしば用いられる固有名詞、称号名、機関の名称なども取り入れられており、実用的である。

発音について疑問な点として、例えば、《本》を表わす語は /nǎŋsǎy/ が普通であるが、本書では /naŋsǎy/ と表記されている。この様な相異はタイ人の間でも個人的に変動のある可能性が強いから、両方を記して注を付すべきであろう。なお、p. v, 37 行の《to be big》を意味するタイ語形は誤植で、正しくは khoo khwaaj のかわりに too tàw を用いる。本書の最初の部分に付された Brief Description of Thai も有益である。(桂満希郎)

Hla Pe: *Burmese Proverbs*. John Murry, London, 1962. ix + 114p.

本書は、School of Oriental and African Studies, University of London の教授でありビルマ語研究の第一人者の一人である Hla Pe 教授による。ビルマ語諺集とでもいうべきものである。著者自身も序文で述べている様に、本書はビルマ語の諺の網羅的な収集ではなく、また学問的な研究書でもない。しかし、ビルマ語を学習しテキストを読む段になると、役に立つところ大である。日常の会話、あるいは小説や新聞などにおいても、諺の用いられる頻度は、日本語

においてよりもビルマ語においての方が、はるかに高いといえるであろう。これらの諺は日本語の感覚からすれば意味を把握することの極めて困難なものが多いが、その様な際、本書は手ごろな参考書としてよく役に立つであろう。

本書は、Introduction, 本文、原文から成る。Introduction においては、ビルマの諺に関する簡単な説明のほかに、Political Setting, Cultural Setting, Economic Background, Social Environment について、諺と関連を保ちながら、概略的な説明が加えられている。本文におさめられた諺の数は 496 であり、Human Characteristics, Human Behaviour, Human Relationships, The World, Man, の五項目に分離されている。本文にはこれらの諺の英訳とそれらに相当する英語の諺とがあげてあり、原文は romanize された形で巻末にまとめられている。代表的な諺は大体カバーされているが、明らかに外国からの借用であるものや、単なる言葉の遊戯、例え話などの類は除外されている。この撰択、分類の基準がややあいまいに思われるが、研究書ではないから、やむを得ないであろう。

上に述べた様に、ビルマ語を読む際の参考書としての実用的な意味以外に、本書にあげられた原文と英訳、あるいは英語の諺とを対照すれば、ビルマ語の簡結な表現法とかいわゆる「ビルマ語らしさ」を理解するという意味からも興味の持てる書である。この点から、巻末にまとめられた原文は、本文の英語と対照してあげられていた方がより良かったであろう。

(桂満希郎)

William A. Smalley: *Outline of Khmu? Structure. An Essay of the American Oriental Society No. 2*. New Haven, Connecticut, 1961. xix + 45p.

クム語はラオス北部を中心に東北タイから北ベトナムにまで分布するモン・クメール系(パラウン・ワ語群)の言語であるが、これまでにこの言語について報告されることはあまりなかった。本書は著者が 1951—3 にルアンプラバン周辺で採録した資料にもとづく *Outline of Khmu Structure* (University Microfilms Publication No. 17,081. Columbia Univ. dissertation. 1956) を僅かに短かくしたものであ

て、簡単なものではあるが、この系統の言語の数少ない文献の一つとして注目に値する。

といっても、本書は単なる言語資料の報告といったものではなく、クム語という一つの言語体系の構造言語学的な記述なのであって、その方法はいわゆる“item and arrangement”のモデルによっている。それは簡単にいえば言語の音韻体系、文法体系のそれぞれを、素な要素と結合法とその結合条件とによって記述できるような一つの代数系としてとらえる考え方であるが、本書では実際の記述にあたっては、“items”と“classes of items”とを相対的な関係にとらえて“items, classes of items and constructions (i.e. classes of arrangements of classes of items)”を記述することによって、音韻体系、文法体系それぞれの階層的な構造を下位から上位へと記述している。この記述方法自体に問題がなくはないが、ともかくこれでクム語の構造を抽象的にとらえることができ、たとえば言語の類型学的研究といったものには多いに役立つにちがいない。なお、そのためには全体の構造図を付すれば直観的な理解をより助けたかもしれない。

しかしそれでは具体的にクム語にどんな言い方があるか、ある意味をどのような形式で表わすかということとは本書からは十分にはわからない。形態論が実際には“constructions”の記述に終わっていて“items”あるいは“classes of items”のメンバーが僅かずつしか掲げられていないからである。本書の規模からいってやむを得ないことだとはいえ、せめて従来の報告書の glossary に相当する“morpheme inventory”を基礎語彙に関してだけでも掲げてほしかった。モン・クメール系の言語は東南アジア諸言語の比較言語学的研究において特に重要なのだが、そのためにはまず語彙資料が第一に必要なのである。

なお、これまでに著されたクム語に関する文献には本書にも言及されている H. Roux の論文のほかに H. Maspero: “Materiaux pour l'étude de la langue t'èng” BEFEO 47 (1955) pp. 457-507 があってこのテン語と本書のクム語とは単に方言的な関係にあるに過ぎないと思われるが、本書では全くふれられていない。Maspero の表記法が不完全であるだけに両者の具体的な関係についての言及があれば資料としての価値が大いに高まったであろうと思われる。

(三谷恭之)

李全壽:「馬來語言與文學」許雲樵輯南洋研究叢書『馬來語研究講座』新加坡世界書局, 1961. pp. 29~58.

シンガポール自治政府が成人教育を促進するために、南洋大学の教職員を動員、分担して1960年8月22日から1961年1月9日まで、シンガポール文化会館で週に一回行われた「マライ研究講座」のまとめがこれである。地理、経済、工業化問題等々、16編収められている論文の中に、上記がはいっている。

この論文は、8節から成っているが、第一節「語言的定義」、第五節「文學的定義」などがあるのは、よほど、市民一般を対象とした講座であつたらしく、このような大きな問題が短い講演の合間に充分述べられ得る筈がなく、全体から見ると蛇足の感を免がれない。さて、著者は、マライ文学を「旧文学」と「新文学」とに分け、更に夫々を Puisi (散文), Prosa (韻文) とに分類する。この「旧」と「新」とは何を根拠にしてこう分けたのか、第四節「馬來語文在馬來語的發展」を見ても、甚だ要領を得ない。然し、韻文を次の8種(それぞれを更に小分する)に分類する方法は、まだ問題があるにしても、一つの新しい試みといえる。1. Bidalan (諺語), 2. Carmina 或 Pantun Kilat (短詩或閃電詩), 3. Pantun (転喻式四行詩), 4. Talibun (多行 Pantun), 5. Seloka (諷刺詩或戲謔詩), 6. Gurindam (兩行諺詩), 7. Sha'er (史詩或敘事詩), 8. Bahasa Berirama (有施律的散文)。マライの四行詩、特に Pantun は一・三行、二・四行が脚韻を踏むところに特徴があり、中国の詩にもこれと似た平仄の法則があるために中国人の興味を引くらしい(編者の許雲樵にも「中国詩経与馬來班敦的比較研究」1963. という論文がある)。李全壽は Pantun を児童; 青年; 老年人 Pantun を三つに分ち、それを更に発想によって細分するという念の入れ方である。但し、Seloka の内の四行詩を戲謔詩と説明し、青年 Pantun にも諷諧詩があるところを見ると、その本質的、根本的な区別をどこでなすのか、それぞれに掲げられた例からは了解することが出来ない。各種の詩型を表わす用語を並べたて、唯それを小分類して見ても、結局は埒があかないのではないと思われる。韻文を分類し得るような用語があるにも拘らず、夫々の詩の持つところの内容は非常に錯綜している。その含む意味も李全壽の分類のようなきっちり